

平成 21 年度提案募集開始企画

片山領域総括に聞く「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域の過去・現在・未来

JST 社会技術研究開発センター (RISTEX) で取り組む「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域は、今年度で 3 年目となり、提案募集も今回が最後となります。今秋には新たな研究開発プロジェクトを迎え、犯罪からの子どもの安全に向けてよりパワーアップしなければと、領域担当は考えますが、立ち上げ前からこの領域を見守り、常に最前線で指揮を取ってきた片山恒雄領域総括はどのような想いを抱いているのでしょうか。領域運営に関して平日頃交わしている議論とは一味違った視点で、この領域の「今まで」と「これから」について、総括の想いを伺うため、インタビューを行いました。(2009 年 4 月 15 日)

・ ・ ・ <領域運営について> ・

● これまでの領域を振り返って、新たな発見や困難に直面したことなどを改めてお聞かせください。



片山恒雄 領域総括

この領域に携わるようになってからの新たな発見は、子どもの安全に携わる関与者の多さ。警察の方をはじめ、学校の先生や PTA、小児科医など、さまざまな立場の人たちが子どもの安全に関わっていることを知って、新鮮だった。知っている人にとっては当たり前のことかもしれないが、門外漢にとっては、新たな発見。知らない人ばかりという中で領域を進めていくことは困難でもある半面、やりやすいこともある。関与者の方々がどういう感覚を持って研究を進めているのかすら分からないし、プロジェクト実施者の方々の中には、その道の一流の人たちもおられるので、そのような方たちにいろいろと意見を言うのは大変だったが、研究開発をよりよいものにするには必要で、知らないからこそ大胆に言えることもあった。特に、このファンドは、他のものと性質が違い、基礎研究だけでなく、成果の社会への実装・還元までを念頭におかなければいけないということをわかっていただけるようになったので、結果的にはよかったのではと思っている。

それと、RISTEX の存在自体も新たな発見の一つかな (笑)

🗨️ これからの領域に対する総括の思いをお聞かせください。

今年度が最後の公募になるので、今まで以上に領域に求められていることに対して、どのような回答を出すかを本気で考えていかなければならない。現在は、非常に広いものと、焦点を絞ったものと、2種類のテーマのプロジェクトが採択されている。これらをうまく融合していけば、必ずいい成果が得られると思っている。領域として大きな成果を出すことも視野に入れ、目標を達成できればと思っている。各プロジェクトに対して、マネジメントとして口を入れすぎた感もあるが、今までやってきたことが形として現れつつあり、全体としては、いい方向に動いているのではないかな。

1年目とは違った視点で2年目の選考を行ったが、私だけでなく、評価者である領域アドバイザーの皆さんも、目標達成に向けた考え方は同様だった。領域に携わっている人全体で同じような認識や考えが、活動を通して生まれたのかもしれない。平成19年度と20年度にそれぞれ1回ずつ、プロジェクト実施者、領域アドバイザーを含むマネジメントグループを集めた領域合宿を行ったが、これはやってよかったと思っている。いろいろな方が年齢を超えて、一緒にたくさんのかたを話し合っ、分かっていただけたことが相当ある。

1年目と2年目のもう一つの大きな違いは、ここ（RISTEX）にくるのが平気になった。最初は遠慮しながら入ってきていたけど（笑）

🗨️ この領域で築き上げてきたものが、領域終了後にどうなることを望んでいますか？

それぞれのプロジェクトや領域としての成果を、領域終了後にどうやって継続していくのかは難しい。いくつかのプロジェクトでは、ここでの成果を発展させるためにNPO法人を立ち上げることを検討しているが、NPOになっても資金はある。せつかくうまく動き出したものが、領域の終了とともにストップしてしまうのが、一番無駄。ボランティアだけではやっていけない。8割はボランティアでも、2割は資金が必要。この2割が最後は死命を制すると思っている。



インタビューの様子

私は、リアルタイム地震情報利用協議会というNPO法人の会長を務めている。はじめは研究としてスタートしたので予算がついていたが、研究終了後に自分たちでどう自立していくか、今はそういう難しい時期にきている。それと同様のことが起こるのではないか。そういう意味では、成果が社会に普及するために、うまく法制化などできるといい。実用化寸前までできているプロジェクトについては、国がサポートしてくれるといいのだが、我々がどこまでそういったところにつなげられるのかは難しいところ。大臣に陳情してもうま

くいくとは限らない。省庁の担当者に仲介してくれそうな人がいるのか、どういうところに掛け合ったらいいのかということが把握でき、関係しそうな機関などうまく連携を取る必要がある。それがうまくいけば、成果の社会への展開の必要性を理解していただけるよう、一緒に説明をしに行くなど、領域としても努力していきたいところ。領域期間中に、成果が期待できそうなプロジェクトのサポートをしていきたいと思っている。

● 残りの期間でどうしても達成しておきたいことは何ですか？

広がりのある大きなプロジェクトについて、もう少し見える形にして、成果を創出できるような体制づくりをぜひ行いたい。また、この領域が終わったあとでも生き残る人のネットワークの基を、なんとしても作っておきたい。最初のネットワークは領域に関わっている人をメインにしたものでいいが、最終的にはもっと広がるといい。ここで築いたネットワークを使って、こういう問題の重要性を世の中に訴えていけるようになると思っている。そういったものを維持するためには、中心となる人やサポートが必要となるので大変だろうが、研究期間が終わったら、「はい、さようなら」というのではもったいない。ここのプロジェクトで培ったノウハウを生かして、また別のプロジェクトを立ち上げるなど、研究や取り組みが継続して繋がっていくような形にしないと、プロジェクトが終了して終わりということをいつまでも繰り返していると、本当にもったいない。



・ ■ ・ <平成 21 年度の提案募集に向けて> ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

● この領域の PR をお願いします。

この領域では、今の時代からすると、それなりの大きさの予算で、本当にいいことであれば、好きなことができる。この「本当にいいこと」がかなり厳しいハードルになる可能

性がある。なんでもいいとは言いつもりはなく、犯罪からの子どもの安全に関わっているということは絶対だが、領域の主旨に合っていれば、研究の自由度はあるはず。何か（学会など）に縛られた研究とか、こういう視点からのアプローチでないと困る、ということはない。やりたいことがやれるというのがいいところではないか。中身がいいということが第一で、さらにプロジェクトがきちんとしたリーダーのもとで力強く行われるという点を考えてくれる限り、相当な自由度がある。

他にも、専門や立場は違うが、犯罪からの子どもの安全という共通のテーマに対して興味があるさまざまな人たちと関わり合え、一緒に問題を考えられるという利点もある。若い人たちにはそういうチャンスをこれからの経験に生かしてもらえるとありがたい。現場の人と研究者の交流という点では、マネジメント側として考えていかなければいけない部分もあるが、問題を抱える人と、それを解く術を持っている人とをつなげるというのは重要なテーマであると思っている。

📍今年度の公募でターゲットとなる提案は？

今回が最後の公募であり、研究期間も3年以内と限られていることから、ある程度の段階まで進んだものを期待したい。全くゼロからという提案でもいいが、3年後には、何らかの形で具体的な像を見せてくれるもの、手法の開発や検討がなされれば実用化や制度化に結びつくもの、そういうものが選ばれるのではないかと。基礎研究は必要ないと言っているわけではないし、その重要さは重々認識しているが、成果の明確なイメージと想定する活用のされ方など、道筋が伝わるものでないと、採択には至らないだろう。



今まで採択したものを見ても、領域設定時には想像もしなかった提案が出てきた。3年目となった今、そういうものでいいものが残っているかどうかは懸念されるが、今の時点では予想もつかないものが出てくることを期待したい。規模の小さなものでもいいので、「犯罪のリスクを減らすには、こういう道をたどっていけばいい」、「そのためにはこんな法制度があればいい」というところも含めて、非常に広い意味で成果の社会への実装・展開が組み込まれているということが大切になってくる。3年間である程度役に立ちそうな具体的な成果まで達成したということを世の中に示せるようなものがほしい。そのために必要な、研究者と現場で問題に取り組む人たちとの協働体制が整えられていることも重要。また、繰り返しになるが、非常に優れたリーダーシップで取り組んでいただくこともとても大切。

●提案を考えてくださっている方々に何か要望はありますか？

とにかく分かりやすく書いてほしい。分かりにくいというだけで、評価が悪くなる（笑）。研究開発、成果の社会への実装・還元という観点から、さまざまな分野・立場の人が審査するので、自分たちの仲間内だけで通じるような言葉で書かれては困る。この領域に興味はあるが、専門家ではないという人にもわかるような表現で書いてあることが大事。分かりやすくすると、科学的にレベルが落ちると思っている人もいるが、そんなことはない。本当にいい研究というのは、分かりやすく説明できるはず。

無駄な予算はないので、取り組むことと予算の整合性をはっきりさせてもらうことが大切。本当に必要なものは予算に積んでいただいてもかまわないが、予算作りのために計画を練ることは、やめていただきたい。そのような提案書はお断りしたい。

●採択後に覚悟しておいてほしいことなどありますか？

採択後もプロジェクトの進め方について口を出します。あとは、進捗状況を丁寧に知らせてほしい。一年後にここまでできたとかできないとか突然言われても困るので、予算、プロジェクトの方向性が変わる、チーム構成が変わるなど、こんなことまで知らせるのか、ということでも知らせてほしい。私たちも一緒にいいものを作りたいと考えているので。

採択後にはプロジェクトの会議にマネジメントグループを参加させていただきたい。これをサイトビジットと呼んでいるが、査定をされる怖い機会と思われるかもしれないが（苦笑）、実際に進捗を聞いて、コミュニケーションを図っていくほうが、いいものはいいと判断できるし、早い段階でよくするための意見交換もできる。いい関係をつくりながら、みんなで、子どもの安全に向けて力を合わせていく。成果が出てきてみたら、全部がばらばらだったというのでは、領域を立ち上げた甲斐がない。プロジェクト一つ一つにいい成果を出していただくのは当然期待したいところだが、大切なのは、子どもの安全という大きな枠の中で適切ところで重なり合っていること。それがないと、領域が成功したとはいえない。RISTEX が設置する外部有識者による評価委員会で高評価を受けるだけが、我々の思うところではない。本当にいい成果を出すためには、世の中から役に立つと認められることが大事。マネジメント側の思いに共感して、子どもの安全に真剣に取り組んでくれる人の応募を期待している。



多くの方のご応募
お待ちしております。

（文 領域担当）